

大阪 あんなとこ ほんなとこ

『御堂筋』

日本の道百選のひとつでもある御堂筋。黄金色一色に染まる秋も勿論ですが、春の新緑、夏の木漏れ日、冬のイルミネーション。季節の彩りに表情が変わる御堂筋。今回は、御堂筋について調べてみました。

現在残る書物の中で、御堂筋の名が出てくるのは、元和元年（1615）、大坂夏の陣の落人狩りなどを記録した徳島藩の「大坂濫妨人落人改之帳」で一番古い記録といわれています。その中で、捕らえられた男女の内の一人の居場所として「大坂御堂筋」と記されているそうです。御堂筋は元来、道幅約6¹、北の淡路町から南の長堀まで約1¹という狭く短い道でした。周辺には、人形問屋や履物問屋などが密集していたそうです。

大正10年（1921）、第7代大阪市長關一により、大規模な「都市大改造計画」が打ち出された時には、市民は「市長は船場の真ん中に飛行場でもつくる気か」と物議を醸したそうです。この改造計画は、梅田から難波を結ぶ南北の道を幅44¹、全長約4¹の道にするというもので都市政策論の学者でもあった關市長が、ヨーロッパの都市を模範としたといわれています。また、百年先を見据えていたという關市長の構想は、道路の下に地下鉄を走らせるものでもありました。

昭和元年（1926）から地下鉄御堂筋線建設と合わせて拡幅工事が行われます。昭和12年5月11日、ほぼ現在の姿に完成。沿道には銀杏が植えられました。この工事の影響で北御堂が移動し、南御堂と共に沿道に並ぶ形になった為、「御堂筋」と名付けられたそうです。

太平洋戦争中は、軍道として使用され、大阪の街全体が大きな被害を受けた大阪大空襲では、御堂筋の沿道の近代的なビルや家屋も全焼するものが多かったそうですが、御堂筋は奇跡的にも、道や地下鉄、街路樹共に無事で戦火の被害を免れました。

交通量が増加した御堂筋は、昭和45年（1970）の大阪万博の開催を機に全車線が南行きの一方通行となりました。高度成長時代、御堂筋沿道には多くの金融機関が集積し、1980年代には、関西一の経済拠点として繁栄。御堂筋にオフィスを構えることがステータスでもあったそうです。



早朝の御堂筋(本町付近)

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞